インディファレント・オルタリティ

津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インディファレント・オルタリティ

【Ｎコード】
Ｎ８９５０Ｏ

【作者名】
津凪

【あらすじ】
現在連載中のパッション・アイデンティティの番外編ＳＳ集。ほとんどが、ヤマ無しオチ無しイミ無しです。でもＢＬ要素は皆無。
※一部キャラクター崩壊あり※

やっちゃんの好みについて

自分の部屋には暖房がなくて寒いので、今日は居間で宿題をやることにした。
居間へ行くと、母さんとやっちゃんがソファに座ってテレビを見ていた。その近くでは朝子が退屈そうにしている。
構わずに食卓へ行き、自分の椅子に腰を下ろす。
筆記用具をテーブルに広げると、居間から声が聞こえてきた。
「やっちゃんは、どういう子が好みなの？」
「は？」
と、少々驚いた様子のやっちゃん。僕は彼が美音と付き合っていることを知っているので、何となく分かるような気もした。
「だって、あんまりそういう話、しないじゃない？」
と、母さんが詰め寄る。息子の好みを気にする母親だとは思わなかった。でも、やっちゃんの口から聞いたことはないので、僕もちょっと気になる。
シャーペンを手にして、宿題にとりかかる僕。
「……うーん」
やっちゃんが唸った。
「芸能人で言ったら、誰？　やっぱりイケメン？」
「……うーん、イケメンっていうか……えっと」
テレビに家電のコマーシャルが流れる。すると、やっちゃんは言った。
「ああ、割とこの人、好き」
ぱっと顔を上げた僕の目に入ったのは、某有名アイドルグループの一人だった。いわゆるイケメン事務所の人だ。
「あー、なるほど」
と、納得する母さん。僕も心の中で納得してしまう。場を賑やかすのが好きで、ちょっと生意気な感じだったからだ。

「……あ、でも、顔はあんまりこだわらないっていうか」
やっちゃんが慌てて言うと、母さんがまた尋ねる。
「そうなの？」
「えっと……ど、どちらかといえば……綺麗な顔、が、良いけど」
やっちゃんは追い詰められていた。僕は宿題の続きをやろうとして、視線を落とす。
「やっぱりイケメンが好きなのね」
と、勝手にまとめる母さんに、やっちゃんがまた慌てた。
「いや、だから、別にイケメンはそこまで好きじゃなくて、っつーか……その……」
でも、改めて考えると美音はそんなにイケメンじゃない。雰囲気はかっこいいと思うけど、何か違う気がする。
「何？」
「……磨けば光るような奴が良い」
やっちゃんがぶっちゃけた。つまり、美音は磨けば光るような奴、ということか。……伝えてあげようかな。
携帯電話を探す僕だったが、すぐに部屋に置いてきたことを思い出してやめた。メールで伝えようと思ったのに残念だ。
「うーん、よく分からないわねぇ」
と、母さん。
やっちゃんはしばらく黙っていたが、ふと立ち上がって居間を出ようとした。だから僕は声をかける。
「明日、ミオに言っちゃおうかな」
はっとしたやっちゃんが僕の方を見て立ち止まり、青ざめる。そして赤くなったかと思ったら、言い捨てた。
「磨けば光るなんて、思ってないんだからなっ！」
「ちゃんと明日、伝えておくよー」
遠ざかるやっちゃんの背に言い返すと、やっちゃんが部屋の扉を勢いよく開けて閉める音がした。
――やっぱりやっちゃんって、面白い人だなぁ。美音がいじめた

くなる気持ちも、よく分かる。

お小遣いの使い方

「あたしは五千円ね」
「僕は六千円だよ。食費は別に貰ってる」
「おれは食費含めて月一万」
「なるほど。みんな普通なんだね」
ちなみにわたしは五千円。といっても、ライブ代に消えるから厳しい。
「で、月にいくらぐらい使う？」
「決まってはないけど……月末に千円残ってれば良い方かしら」
「僕は、半分は貯金して残りを使うんだけど、そんなに残らないなぁ」
「……食費で全部消える」
「なるほど。内訳は？」
ちなみにわたしは小銭しか残らない。画材なんか買っちゃうと、本当に厳しい。
「遊びで二千か三千円、放課後の買い食いに千円ってところね。あとお菓子」
「僕も遊びに行くくらいかな。あんまり遊ばないけど」
「食費」
「なるほど。すごく普通」
ちなみにわたしはほぼライブ代。小銭を貯金してはいるけれど、なかなか貯まらなくてねぇ。
「滝口、あんたはどうやって生活してるの？」
「……いや、でもあんまり遊び行かねぇし、漫画とかゲームとか買わないから」
「何か買ったりしないの？　お菓子とか」
「え……えっと、その時はその時で、小遣い稼ぐから平気」
「あれ、滝口くんってバイトしてたっけ？」

「いや、バイトっつーか……なんつーか……」
視線をさまよわせる滝口くん。何やら、言いにくそうにしている。
「あの、知り合いの店手伝ったりして、その時だけ金貰うんだ」
ああ、なるほど。
「良いなぁ、わたしもバイトしたいんだよねぇ」
「そ、そうか」
「お店やってる知り合いなんていたんだ？　初耳だわ」
「そりゃ、な」
「あ、だからギターも買う気になったんだね」
「え？　いや、ああ、うん」
「そうだよね、お金貰えるなら高い物でも買えるもんね」
「う、うん」
会話内容をノートにまとめ、さっと読み返す。
成長期の男の子が食費一万じゃ、足りなくて当然だよね。良いなぁ、わたしも働きたいなぁ。

「やっちゃんもそうだったの？」
「は？」
「お小遣い。高一の時は六千円だった？」
「……ああ、そうだな。うん、六千円だった」
「今は？」
「え……食費とか交通費とか含めて一万八千」
「やっぱりもらってたんだ……」
「バイト辞めたからな」
「そうだけど、でも何で？」
「うーん、つまらなかったから」
「……何ヶ月やったんだっけ？」
「一ヶ月」
「……僕は頑張ってやっちゃんを反面教師にするよ」
「……それを言いに来たのか？」

「え、いや……あ、内訳は？」
「内訳？　んなこと……一万二千くらいが食費とかで消えて、残りはいろいろだな」
「いろいろって？」
「雑誌買ったりＤＶＤレンタルしたり……」
「朝帰りの時は？」
「ああ、それはホテル代が……何言わせてんだ、お前っ」
「ちょっと聞いてみただけだよー。他意はないよー」
「くっそ……もう用がないなら失せろ！」
「えー、そんな……分かったよ、失せるよ。ありがとね、やっちゃん」
「……ふん」

藤堂家の兄二人

「あれ、朝子は？」
「颯人くん家に遊びに行ってるわ」
「ふーん……え？」
目を丸くしてこちらを見た夜司に、母は言った。
「だから、颯人くんのお家に行ってるの」
「誰？」
「お友達。今一番仲良しの子ね。お互いに相性が良いみたいで」
と、笑う母。
夜司はしばらく呆然としていたが、冷蔵庫からペットボトルを取り出して居間へ向かった。
「あれ、朝子いないの？」
と、台所の方から夕樹の声。
「颯人くん家に行ってるの。もう少ししたらお迎えに行かなくちゃ」
と、母。
夕樹は何を思ったか、
「颯人くんって、この前手繋いで歩いてた子だよね？」
と、問う。
「ええ、そうよ。あの子たち、本当に仲良くて」
「……そっか」
と、夕樹は冷蔵庫を開けると袋に入ったシュークリームを取り出して居間へ来る。
「あ、やっちゃん」
「おう」
夜司が適当に返事をすると、夕樹はその隣に腰を下ろした。
袋を開けてシュークリームにかじりつく夕樹。
「朝子に男の子の友達、か」
と、憂鬱そうに溜め息をついて見せる。

「朝子も成長してるんだなぁ」
「……当たり前だろ」
と、夜司は手にしたペットボトルにそのまま口を付ける。
「僕、見たことあるから分かるけど、颯人くんってイケメンなんだよ」
「は？」
「子どもにしては顔立ちがしっかりしてるっていうか、朝子が気に入るのも当然っていうか」
「で？」
「……悲しくならない？」
「ねぇよ」
「だよね。やっぱり悲しくなるよね」
「ねぇっつってんだろ」
「あー、朝子に彼氏が出来たらどうしよう」
「……」
「十年後とか、考えたくもないよ」
「……」
「結婚式とか、絶対に僕泣いちゃう。むしろ結婚認めない」
「認めてやれ」
「だって、朝子が僕らから離れて行っちゃうんだよ？　悲しすぎるっ」
「……まぁ、な」
「朝子がこの家を出て行く日が来るなんて……あーあ」
「でも、妹の幸せを祝福するのも兄としての務めだろ」
「そうかなー」
「じゃあお前、朝子がお前の友達好きになったらどうするよ？」
「え、絶対に引き離す！」
「俺がお前の友達好きになったら？」
「え……勝手にどうぞ？」
「ひでぇな、お前。その差は何だ」

「だってだって、やっちゃんと朝子じゃ違いすぎるっていうか……
あ、そうだ！」
「ん？」
「朝子がレズビアンだったら許せるかも」
「おい」
「だって、それなら変な男に捕まらなくて済むでしょ？　そうだよ、
それなら僕も安心だよー」
「何か間違えてる、絶対に何か間違えてるぞ」
「やっちゃんもそう思うでしょ？」
「ねぇよ」
「何でー？」
「だっておかしいだろ、その考え」
「そうかなー？」
「それに、俺はお前と違ってシスコンじゃねぇし」
「えー、嘘は駄目だよー？」
「嘘じゃねぇっつの」
「何で何で何でー？」
「うっせぇ、黙れ。っつか、さっさとシュークリーム食え」
「えー、本当はやっちゃんだってシスコンのくせにー」
「だから黙れって言ってるだろ！」
「えー、そんな態度ばっかり取るから、朝子に嫌われるんだよー」
「うっせぇ！　良いんだよ、俺は！」
「じゃあ、何で？」
「だから……っ、いざという時、俺を頼ってくれればそれで十分だ
っつーの！」
「……たぶんそれ、伝わってないと思うよ」
「……黙れ、このクソガキ」
「もう、やっちゃんってば口悪いんだからー」

藤堂家の兄二人　その2

「ばれんたいんちょこあげるー」
と、朝子は手にした袋を夕樹へ差し出した。
「わー、クッキーだ。ありがとう、朝子」
と、靴を脱ぎながら微笑みを返す夕樹。
朝子は満足げにこっこりすると、居間へ向かう兄の背を追った。
「ただいま」
「おかえりなさい。チョコ、冷蔵庫に入ってるから勝手に食べてね」
と、母がテレビから目を離さずに言う。
「え、ああ、うん」
人気ドラマの再放送にすっかり見入っている母に返事をし、自分の部屋へと向かう。
朝子は夕樹が部屋から出てくるのを廊下で待っていた。
そして、私服に着替えて出てきた夕樹の後を付いて行く朝子。
居間へ戻った夕樹は、手にした数々のお菓子をテーブルの上に置いた。床に座り込んで、朝子へ言う。
「朝子も食べる？」
「うん！」
朝子はまだ幼いながら、この日はチョコレートを兄からもらえることを知っていた。
「じゃあ、まずはクラスの人にもらったのを食べようかな」
と、市販のチョコレートの小袋を開ける夕樹。すぐに二つに割って、一つを朝子へあげる。
それを口の中に放って、残りを物色する。
「次はー……塚田さんかな」
ＣＭの合間に、母がテーブルの上を見て呟いた。
「今年は少ないのね」
「本命もらったから」

さらりとのろけた息子に、母は溜め息をついた。すっかり大きくなって……反抗期がないのが、せめてもの救いかしら。
袋から取り出した丸いクッキーを朝子にあげてから、夕樹は四角いクッキーを口へ運んだ。
「……あ、これ紅茶だ。おいしい」
色が違うのでそうかなと思っていた夕樹は、その味を存分に味わう。そして、
「三枚目は朝子にあげるよ」
と、袋ごと渡す夕樹。
「さて、これからが本番だ」
と、箱をきっちり真正面に置きなおす。生チョコと言っていたけれど……と、わくわくドキドキしながら、夕樹は箱を開けた。
「……あ、うわぁ！」
慌てて落胆を驚きに変える夕樹。箱の中には、よくある四角形の生チョコがあるはずなのだが、形がすごく悪かった。
「あら、何それ？　ブラウニー？」
見ようによってはそうも見える。
「な、生チョコだよ！　見た目は、ちょっと、あれだけど……」
と、夕樹はその内の一つを手に取った。感触は、若干固い。しかし、口に入れればとろけるはず……！
口の中へ放り込むと、夕樹の顔が引きつった。
「まずいの？」
と、母の視線。
夕樹は首を横に振った。
「おいしい。おいしいんだけど、何か違う」
クッキーを食べ終えた朝子が生チョコに手を伸ばした。躊躇うことなく食べて、一言。
「あまくないぃ」
「……あ、後でまた食べるから残しておこう」
と、無意味に言い訳をして箱に蓋をする。本命チョコなのに残念

だ。
「次は朝子のだよ。楽しみだな」
と、夕樹は気を取り直して言う。
袋を開けてクッキーを一枚取り出し、とても普通に食べた。
「うん、おいしい」
それを聞いた朝子は、先ほどの生チョコなどなかったかのように、にっこり笑顔になった。

夜司が帰ってきたのは夜十時を過ぎた頃だった。
「おかえりなさい、やっちゃん」
と、母に出迎えられてちょっと驚く。
「ただいま」
靴を脱いで中へ入ると、居間の方から朝子がやってきた。
「まだ起きてたのか」
と、声をかけると、朝子は手にした袋を夜司に差し出した。
「ばれんたいんちょこ、あげるの」
そして眠たそうに大きな欠伸をする朝子。
「……ありがとう」
と、夜司は袋を受け取ると、その場にしゃがみこんだ。
朝子の頭を撫でてやり、にこっと微笑む。
「わざわざ待っててくれたんだな」
「うん」
夜司は朝子を抱き上げると、母を振り返った。
「俺が寝かしつけるよ」
「そう、分かったわ」
兄の首にもたれかかり、うとうとする朝子。
寝室へ連れて行き、ベッドに朝子を寝かせる。
「おやすみ、朝子」
と、毛布をかけてやると、両目を閉じた朝子はすぐに寝息を立て始めた。年齢がいくら離れていようと、朝子にとっては夜司も大事

な兄なのだろう。
寝室を出ようと立ち上がる夜司だが、すぐにその姿に気がつく。
「もう寝ちゃった？」
と、小さな声で尋ねてくる夕樹。
「ああ」
夜司は頷くと、夕樹を廊下へ出るよう促す。その後に続いて寝室を出ると、静かに扉を閉めた。
「帰ってくるなら、もっと早く帰ってくれば良かったのに」
「んなこと言われても、まさか起きて待ってたなんて思いもしなかったんだから、しゃーないだろ」
と、言い返す夜司。
二人はそれぞれの部屋に向かって歩き出した。
「バレンタイン、颯人くんにもあげたんだって」
「ふぅん、そうか」
「それもチョコ塗ったやつ」
「……そうか。これは義理か」
「はは、当たり前でしょー」
「でも、ちゃんと返さなきゃな」
と、夜司は扉の前に立って弟を振り向く。
「俺、マシュマロにするから、お前は別のにしろよ」
「え？　そんな、ひどーい」
夕樹が思わず声を上げると、夜司は笑った。
「こーいうのは早いもん勝ちなんだよ。じゃあな、おやすみ」
と、扉を開けて自室へ入っていってしまう。
見送った夕樹は、不満そうに兄の部屋に向けて悪口を言う。
「やっちゃんのバーカ。ツンデレシスコン。おやすみ」
そしてすぐに自分も部屋に入る。
夜司は何も言い返さず、ただ今日は良い日だと思うだけだった。
たまにはこんな風に、弟妹と過ごすのも良いかもしれない。

考えすぎた夕樹

夕樹は悩んでいた。
辞書を借りようと兄の部屋に入ったところ、見つけてはいけないものを見つけてしまったのだ。
「……」
薄っぺらくて小さな袋、いわゆる避妊具（コンドーム）である。
同性愛者である兄には無縁の物だと思っていた夕樹は、思わず考えてしまった。
――やっぱり、女の人にも興味があるのかな？　それとも、やっちゃんのことだから、感染病予防とか？　そうだ、ＨＩＶは同性愛者の中では感染のリスクが高いって……まさか、ね。
いずれにしても、見てはいけないものである。
それを元あった場所へ静かに戻し、夕樹はそそくさと部屋を出ようとした。
「あ」
がちゃっと扉が開かれ、部屋の主が顔を出す。
「何だ、いたのか」
と、何も知らない夜司は言った。
「う、うん。ちょ、ちょっと辞書、借りるね」
夕樹は手にした辞書をわざとらしく見せながら、中へ入ってきた夜司とすれ違う。
「おう」
そして扉を開け、廊下へ片足を踏み出す。
「ねぇ、やっちゃん」
夕樹はわき上がる好奇心をこらえきれず、兄を振り返った。
「ん？」
ベッドに腰を下ろした夜司が夕樹を見る。
「もう何を言われても、僕は驚かないからね」

と、意味深な笑みを浮かべると、夕樹は部屋を出て行った。
「……は？」
夜司は首を傾げたが、考えても答えは出なかった。やましいことなど、もう一つもないはずなのだけれど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8950o/

インディファレント・オルタリティ

2010年12月26日19時25分発行